

都城市内遺跡 11

- *The Sites excavated in Miyakonojō City (11th)* -

2018

都城市教育委員会

序

本書は、都城市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。各種開発に対し埋蔵文化財の保護を目的に行った試掘・確認調査、遺跡の範囲確認調査、自然崩壊によって発見された地下式横穴墓の発掘調査の記録を報告しています。

この報告書が文化財行政の一資料としてだけではなく、学校教育・生涯学習の場などで広く活用され、地域の歴史を知る手掛かりとして活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、多大なる御協力を賜りました各関係機関、地域の皆様に対し深く感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月

都城市教育委員会
教育長職務執行者 小西宏子

例言

1. 本書は、都城市が平成 29 年度に国宝重要文化財等保存整備費補助金及び宮崎県埋蔵文化財緊急調査補助金を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 補助事業の事業主体は都城市、調査主体は都城市教育委員会である。

3. 調査の目的は、都城市内の各種開発予定地における埋蔵文化財の有無及び遺存状況の確認、遺跡の範囲確認である。

4. 本書では、平成 29 年度実施の試掘・確認調査のうち、補助事業として実施した 18 件、平成 28 年度に実施した確認調査 1 件、平成 15 年度に実施した地下式横穴墓緊急調査 1 件の概要を報告している。

5. 現場における記録写真の撮影及びトレーニング配置図・土層断面図の作成、製図、調査概要の作成は、各調査担当者が行った。

6. 古人骨の分析は竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）に依頼した。

7. 出土遺物の実測は、文化財課副課長柴畠光博・副主幹栗山葉子・副主幹近沢恒典・嘱託外山亜紀子及び整理作業員が行い、製図は柴畠・栗山・近沢が行った。

7. 本書の作成は、各担当者が作成した調査概要・写真をもとに近沢が中心となって行い、竹中正巳氏より玉稿を賜った。築池地下式横穴墓群（2003-2 号）の報告は柴畠が作成した。

8. 現場における測量には遺跡調査システム「Site Xross」、本書に使用した図面の製図・編集には「トレースくん」・「Adobe Illustrator CC」・「Adobe InDesign CC」を使用している。

9. 本書の調査区位置図に示している「過年度調査地点」は、本年度以前に試掘調査・確認調査・記録保存を目的とする発掘調査のいずれかを実施した地点である。

10. 出土遺物及び各種記録類は、都城市教育委員会で保管している。

目 次

1. 試掘・確認調査の概要	1
2. 祝吉第3遺跡（第1地点）	5
3. 片平遺跡（第2地点）	9
4. 峯元第1遺跡	12
5. 郡元西原遺跡範囲確認調査	15
6. 築池地下式横穴墓群（2003-2号）	30
7. 宮崎県都城市築池地下式横穴墓 2003-2号墓出土の古墳人骨	36
報告書抄録	39



都城市マイブンキャラクター「いそいちくん」

都城市マイブンキャラクター「ただただ」

1. 試掘・確認調査の概要

都城盆地は九州南部内陸部にあって、霧島火山群の東南のふもと、宮崎県南西部から鹿児島県北東部にかけて広がる。その起源は列島形成時の陥没帯とされる。基盤層は四万十累層群とされ、近隣火山群の強い影響の下、シラス台地などの火山噴出物起源の地形形成が発達している。南北に細長い盆地の周縁には標高 400 m 程度の山地が連なり、南のみが大隅半島にむけて開口する。四方より流入する河川群は、盆地を南北に貫流する大淀川へと収束されたのち、北縁の山地帯を抜け宮崎平野へと至る。内部地形は大淀川を境に西側のシラス台地、東の扇状地性の低位段丘に大別される。

都城市は東西 25 km、南北 35 km、面積約 650 平方 km、周縁山地を含む盆地の大半を占めている。人口規模は約 16 万 2 千人、中心的な市街地は盆地底南部の扇状地面に形成されている。

都城市内における「周知の埋蔵文化財包蔵地」は、山間部を除く各地形面にまんべんなく分布するが、大淀川やその支流沿いの河岸段丘面、台地縁部、開析扇状地の側端部における分布密度が高い。また、九州南部域では霧島火山群や桜島などの火山群から噴出したテフラが多く分布しており、遺跡調査の際の指標として利用されている。都城市内でも複数の火山灰層が確認されるが、目視同定が可能な次の 6 種が試掘・確認調査の際に多く利用される。霧島新燃岳享保軽石 (Kr-SmK・霧島火山新燃岳起源・1717)、桜島 3 テフラ (Sz-3・桜島文明軽石・桜島起源・1471 年・土層説明では白色軽石・灰白色軽石と記載)、霧島御池軽石 (Kr-M・霧島火山御池起源・約 4,600 年前・土層説明では黄色軽石・黄橙色軽石と記載)、鬼界アカホヤ火山灰 (Kr-Ah・鬼界カルデラ起源・約 6,600 年前)、桜島 11 テフラ (Sz-11・桜島起源・約 8,600 年前)、桜島薩摩テフラ (Sz-S・桜島起源・約 12,800 年前)¹⁾。

平成 29 年度、民間事業に伴う埋蔵文化財の照会件数は 414 地点（集計数値は平成 30 年 2 月 17 日時点。以下同様）の記録が残り、公共事業に関しては府内の事業調査にて 149 事業が把握される。前年度と比較し、民間事業は 100 件程度の増加、公共事業はほぼ同規模となっている。

試掘・確認調査は民間事業において 57 地点、公共事業では 21 地点の調査を実施した。民間事業では個人住宅や宅地造成、太陽光発電施設、事業所建設など多岐にわたり、公共事業では道路拡幅、農業基盤整備事業、公有地売却、遺跡範囲確認などが主体となる。これらの試掘・確認調査のうち、18 件を国・県の補助事業として実施した。

文化財保護法に基づく発掘届出（文化財保護法第 93 条関係。以後、法と略記）は 67 件、発掘通知（法第 94 条関係）は 18 件を宮崎県教育委員会へ進呈・通知した。宮崎県教育委員会からの通知内訳は、記録保存のための発掘調査 8 件、工事立会い 32 件、慎重工事 33 件、処理中 6 件、事後提出に対する指導 6 件である。発掘調査に関しては、都城市教育委員会が主体となる調査が 3 件、宮崎県埋蔵文化財センターが主体となった調査が 5 件である。

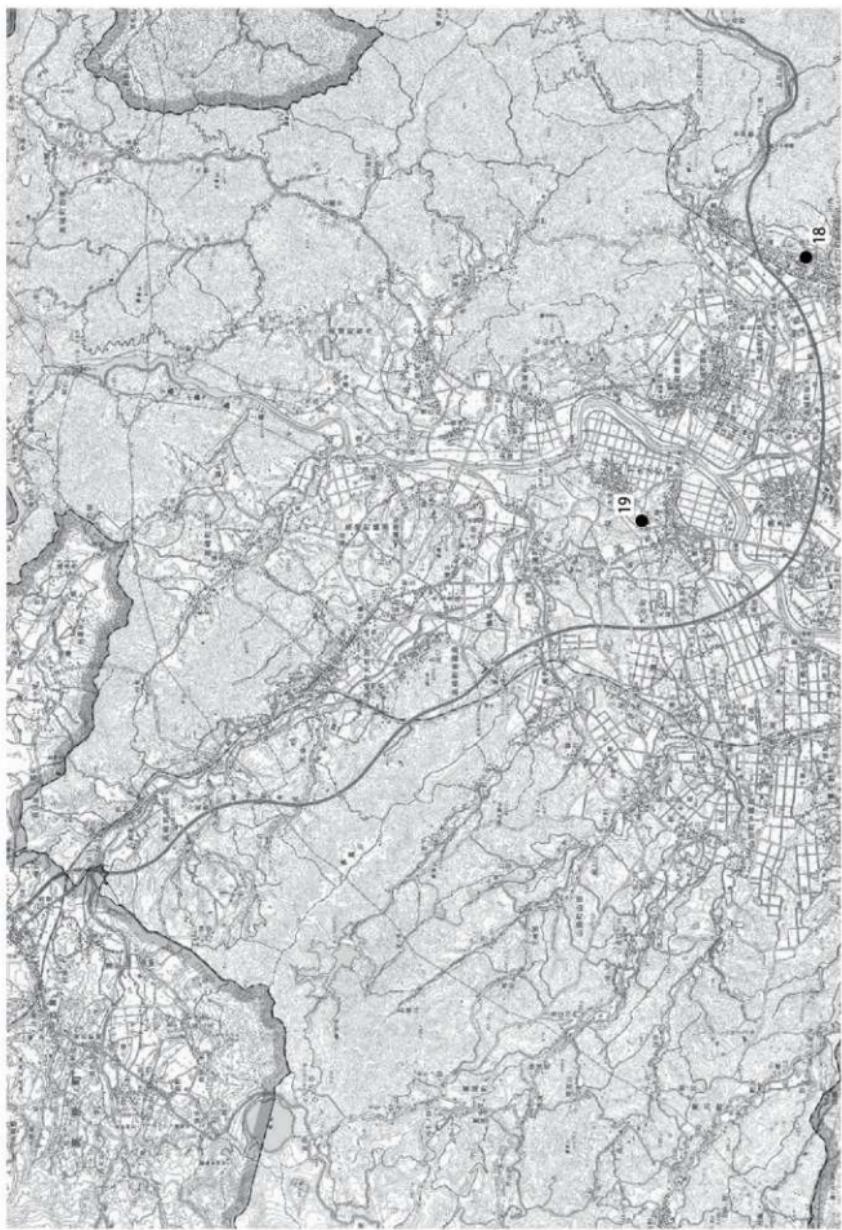
築池地下式横穴墓群（2003-2 号）は、平成 15 年 8 月に耕作中の陥没によって発見された地下式横穴墓である。今まで未報告となっていたが、都城の古墳時代を考える上で重要な資料であるため、本書にて合わせて概要を報告する。

【調査組織】調査主体 都城市教育委員会

教育長	黒木哲徳（平成 30 年 2 月 24 日まで）
教育長職務執行者	小西宏子（平成 30 年 2 月 25 日から）
教育部長	田中芳也
文化財課長	武田浩明
副課長	桑畑光博
副主幹	栗山葉子 近沢恒典
調査担当	桑畑光博 栗山葉子 近沢恒典 加覽淳一 外山亜紀子 早瀬航 川俣暢子
庶務	黒木奈央子（平成 29 年 12 月まで）
	木下真由美（平成 30 年 1 月から）

1) 早田勉、2006、8-4 都城盆地とその周辺に分布するテフラ（火山灰）、「都城市史 資料編 考古」：609-629、都城市。

2) テフラの年代は 1) の曆年較正年代を用いている。



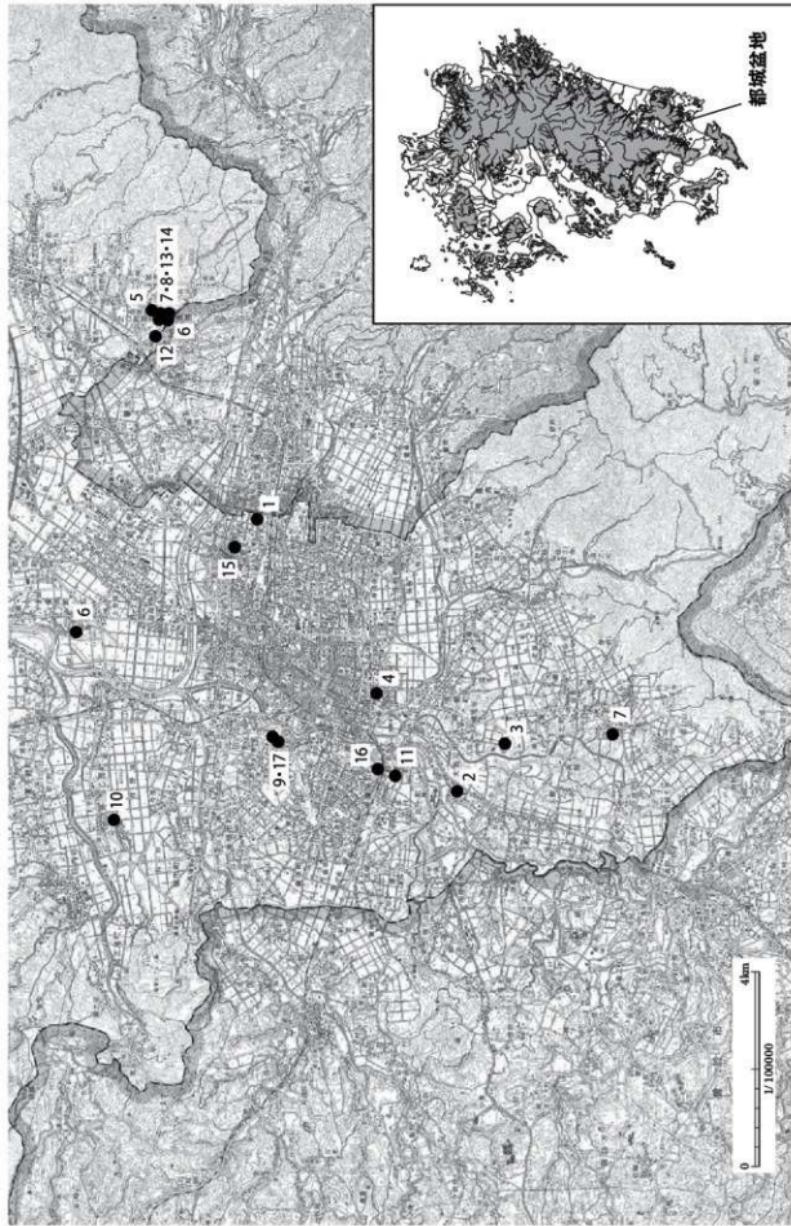


図1. 試掘・確認調査地点 (No.は表1と一致)

表1. 試掘・確認調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査対象	調査期間	主な時代	主な遺構・遺物	備考
1	祝吉第3遺跡(第1地点)	福元町3428	宅地造成	4/12	中世	大型溝状遺構・ピット	
2	宮尾・立野遺跡	今町9068-4	治溝・治籠貯水溝	4/24	中世?	ピット	
3	柳尾原遺跡	人吉町5948.2ほか	運動公園造成	5/22-6/5	縄文・弥生・古代 土師器	縄文(早期)：土器／余生窓穴建物：土器／古代：植立柱物・ 「南御前塚」範囲内	大
4	仲井(姫野町)	姫野町3168.5ほか	店舗軒梁	5/31	近世	ピット・土坑・陶磁器	
5	犬王遺跡	山之口町富吉6534.6ほか	畑地かんがい事業	6/19	縄文・古代	土器／古代：土師器	高木第3地区(1期-1)
6	仲井(山之口町富吉)	山之口町富吉5200	畑地かんがい事業	6/19	弥生	土器	高木第3地区(1期-2)
7	犬王遺跡	山之口町富吉643.2ほか	畑地かんがい事業	6/30・7/3	古代	土師器	高木第3地区(1期-3)
8	仲井(山之口町富吉)	山之口町富吉5218ほか	畑地かんがい事業	7/14	-	-	高木第3地区(1期-4)
9	片平遺跡	志比田町4991.15	個人住宅	7/24-25	中世?	土坑	
10	上平田遺跡	乙原町2551.2	個人住宅	7/26	弥生	土器	
11	八幡坂遺跡	墨田町937.3ほか	個人住宅	8/1	中世・近世	土器・焼成物・瓦・近世：漆器・油壺	
12	相原第1遺跡	山之口町富吉1529.1ほか	畑地かんがい事業	9/6	弥生	土器(多量)	高木第3地区(2期-1)
13	仲井(山之口町富吉)	山之口町富吉6708.1ほか	畑地かんがい事業	9/7	-	なし	高木第3地区(2期-2)
14	中島原遺跡	山之口町富吉5219.1ほか	畑地かんがい事業	9/8	-	なし	高木第3地区(2期-3)
15	福元内原遺跡周辺	福元町3351.4ほか	道路範囲確認	2016/11/29-12/16 2017/9/25-10/20	中世	大型溝状遺構・溝状遺構・ピット・土器・陶器	「福元西原遺跡」遺跡範囲
16	都城跡	青鷹町667.4ほか	道路範囲確認	12/6-12/25	中世	施・施底道・陶器	四出人
17	片平遺跡(第2地点)	志比田町4991.10ほか	福地施設建設	1/9	弥生	花井林住持・ピット・土器	
18	幸元第1遺跡	山之口町花木2447.1	太陽光発電施設	1/26	縄文・弥生・古代 土師器	縄文(晚期)：幸元住区・土器・石器・余生：土器／古代： 土師器	
19	染池地下水鉱穴群	下水流町2539.2	自然崩壊	2003/8/5-29	古墳	地下式巣穴墓・人骨・刀子・貝冠・須恵器	2003-2号墓

2. 祝吉第3遺跡（第1地点）

所在地 郡元町 3428

担当者 加賀淳一・福添暁久・

調査原因 宅地造成

外山亜紀子

調査期間 2017.4.12（再確認：5.8～11）

調査後の措置 現状保存

調査面積 44m²

位置と環境 開発予定地は盆地底南部に広がる開析扇状地面（一万城扇状地）の北部に位置している。現況は畠地である。

周辺域では、宅地造成などにより多くの確認調査・本調査が実施されている。北に隣接する1993年調査区（1次調査区）では多数の柱穴群、溝状遺構、井戸状遺構のほか、南北方向にのびる幅4m以上の大型溝状遺構（大溝）が確認されている¹⁾。遺物は13～14世紀を主体とし、少量ながら15～16世紀代の青花小片なども認められる。西に隣接する2013年調査区（2次調査区）では多数の掘立柱建物跡が検出され、遺物の主体は13～14世紀、遺構群の主体は14世紀代と推定されている²⁾。また、2013調査区の西には宮崎県指定史跡「祝吉御所跡」がある。「祝吉御所跡」は島津氏初代の惟宗忠が、1185年（文治元年）に島津荘下司職に補任され、南九州へ下向した際に構えたとされる館の伝承地である。公園整備に伴い1994年に実施された確認調査では、12世紀後半の青磁、13～14世紀の土器器などが出土し、東西方向の道路状遺構、土坑・柱穴などが検出されている³⁾。

今回の調査では4月12日に確認調査（1～4T）を実施し、5月8～11日にかけて大型溝状遺構の範囲確認を目的とした再確認調査（5～6T）を行った。併せて概要を報告する。

調査の結果 トレンチ5箇所を設定し、確認調査では人力のみ、再確認調査では重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土（1層）、褐色砂質土（2層）、黒褐色土（3層）、霧島御池軽石漸移層（4層）、霧島御池軽石（5層）、黒色土（6層）、鬼界アカホヤ火山灰（7層）に大別される。いずれのトレンチでもトレンチャー（牛蒡栽培時の機械深耕）による搅乱が進行していた。遺構検出は4層にて行っている。

1T・3～6Tでは南北方向にのびる大溝（SD1）を検出した。5Tでは大溝に接続する東西方向の溝状遺構（土層⑦ほか）、6Tでは掘り返しとみられる重複する2条の溝条遺構も観察された。また、上位から低位にかけて多数の硬化層（5T：⑨層・⑩層、6T：⑩層・

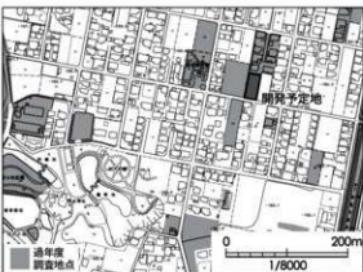


図1. 調査区位置

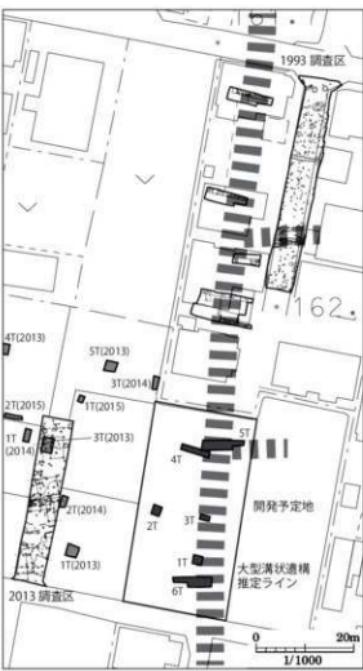


図2. トレンチ配置

1) 都城市教育委員会、2015、「祝吉第3遺跡（第2次調査）」

2) 都城市、2006、「都城市史 資料編 考古」

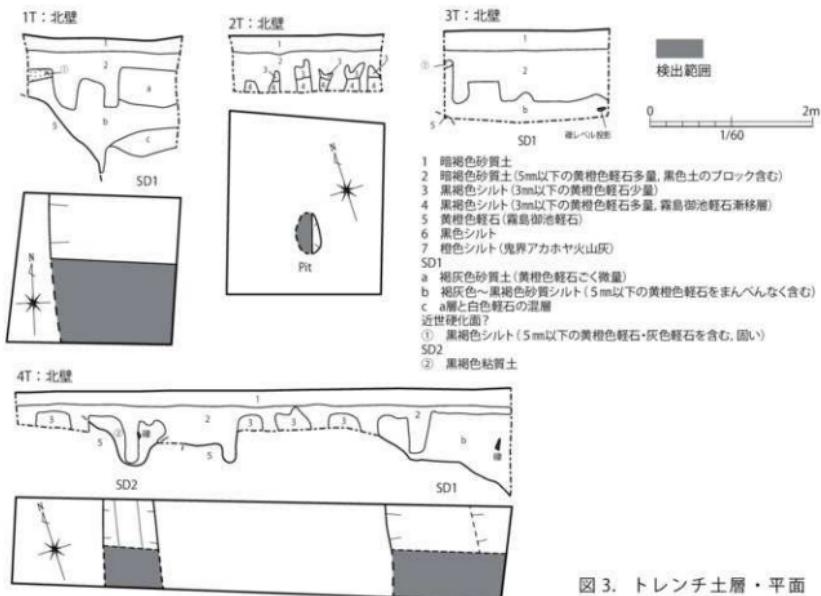


図3. レンチ土層・平面

⑩層ほか)が形成されており、道路としての使用も想定される。

遺構内からの出土遺物はほとんどなく、土師器や備前焼擂鉢の小片が出土したのみであった。大溝の埋土の多くには白色軽石(桜島文明軽石)が含まれており、中位から低位にかけてまとまった堆積(5T: ⑪層、6T: ⑫層・⑬層など)が観察される。この点からは、大溝の掘削・使用が桜島文明軽石降下(1471年)前後にあったことが推測される。

そのほか、4Tでは大溝に並走する小規模な溝状遺構(SD2)、2Tでは柱穴1基を検出した。遺物包含層は2~3層であり、土師器片・弥生土器片が出土しているが、レンチによる搅乱により、原位置を保っていないものが多い。

以上の結果より、開発予定地には弥生時代・中世の遺物包含層および中世の溝状遺構や建物跡を主体とする遺跡が存在している可能性が高いと判断した。また、今回の調査では1993年調査区からのびる大溝の様相を観察し、さらに南への継続を確認できたことも大きな成果といえる。



図版1. 1T検出(南から)



図版2. 2T検出(南から)

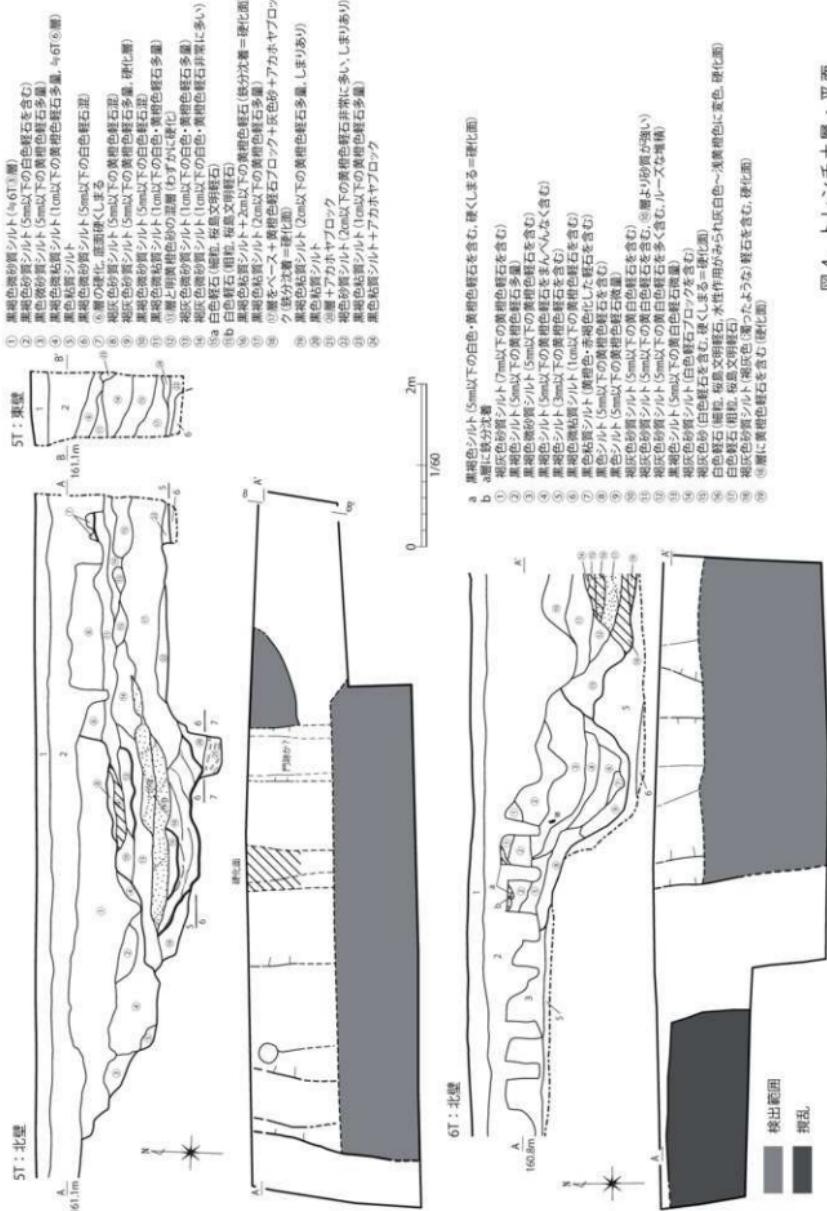


図4. トレンチ土層・平面



図版3. 4T(東から)



図版4. 5T: SD1(西から)



図版5. 5T: SD1 北壁土層



図版6. 6T: SD1(西から)



図版7. 6T: SD1 北壁土層



図版8. 調査前(南から)



図版9. 作業状況



図版10. 調査後(南から)

3. 片平遺跡(第2地点)

所在地 志比田町 4991-10 ほか

調査面積 20m²

調査原因 福祉施設建設

担当者 近沢恒典・早瀬航

調査期間 2018.1.9

調査後の措置 協議中

位置と環境 開発予定地は盆地底南西部に広がる成層シラス台地面(蓑原台地)の東縁、大淀川左岸に形成された東から西へと緩く傾斜する河岸段丘面の端部に立地している。現況は樹木を伐採した後の荒地の状態であった。以前、一部で造成が進められていたようであり、地形面としては最も高い西～中央部(1～3T・7T:第一面)、それよりも低い北部(6T:第二面)、一番低い西部(4T・5T:第三面)に大別される。

周辺域では、今回の開発予定地の南約500mのニタ元遺跡にて店舗建設に伴い1993年に実施された発掘調査において、古墳時代中期竪穴住居跡、古代掘立柱建物跡・道路状遺構のほか、15世紀代と考えられる大規模な造成と幅10m、深さ10mに及ぶ非常に大規模な溝状遺構が確認されている¹⁾。

調査の結果 トレンチ7箇所を設定し、重機・人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は表土・旧耕作土(1・2層)、桜島文明軽石(3層)、黒褐色土(4・5層)、霧島御池軽石(6・7層)、黒色土(8層)に大別される。遺構検出は5層下位を中心に、トレンチの状況に応じて6層・7層で行った。

1Tでは4層を中心にも量の弥生土器片が出土した。遺構は不整形で浅い土坑(SC1)、ピット1基(P1)を検出した。

2Tは第一面でも一段高い部分にあたり、1層直下が上位を削平された7層となっていた。竪穴住居跡1基(SA1)を検出した。削平のため検出面からの深さは約20cmと浅い。壁面が内部に突出する部分があり花弁状住居と捉えられる。住居内堆積土は粗い黄褐色軽石が散乱する黒色土であり、人為的な埋め土と考えられた。底面には非常に固くしめられた貼床がみられる。住居内では土坑と考えられる落ち込み(SC1・未掘)、柱穴(P1)それぞれ1基を検出した。遺物は床面より少し高い位置にて多量の土器片や軽石が出土した。1は小型甕である。壁面付近でまとまって出土しており、埋め戻し時の圧潰が推測される。頸部から口縁部にかけてわざかに外反する。非常に明確な脚台がつく。胴部上半から口縁部にかけて多量の炭化物が付着し、胴部下半には広範囲にわたる表面の剥離がみられる。2は壺底部～胴部でありほぼ直立した状態で出土した。底部がややレンズ状を呈する。包含層出土土器も含め、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器群と考えられる。

3Tでは南北方向にのびると考えられる溝状遺構を検出した。幅は90cm以上、検出面からの深さは1mを測る。遺物は出土していない。3Tは5層までが深さ90cmとやや深く、北側谷地形への傾斜と推測される。遺構・遺物は出土していない。



図1. 調査区位置



図2. トレンチ配置

1) 那城市教育委員会、1994、「ニタ元遺跡」

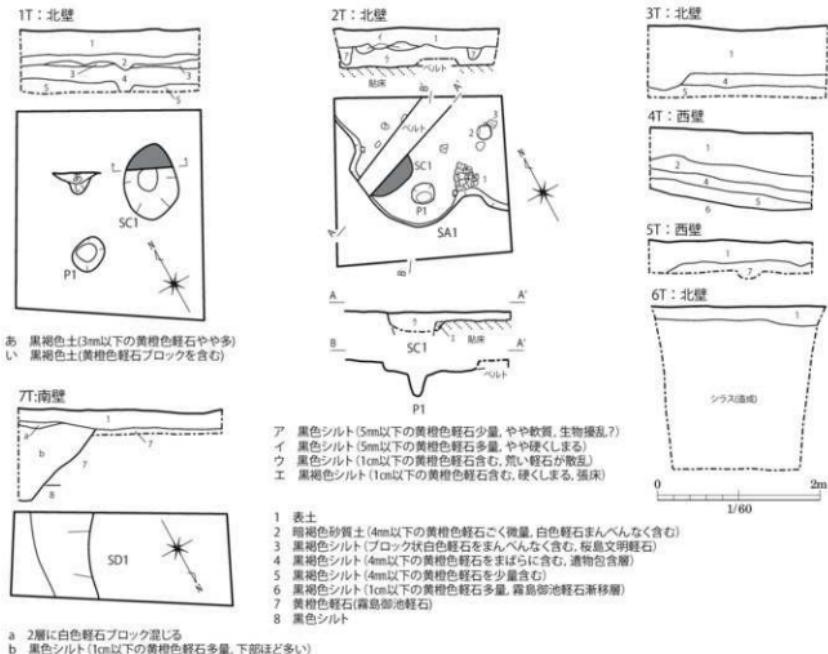


図3. トレンチ土層・平面

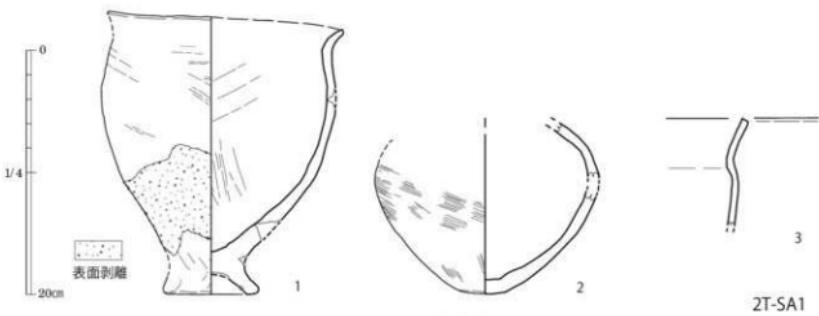


図4. 出土遺物

6T では深さ 2 m 以上のシラスの堆積が認められた。しまりの弱い様相からは人工的な形成層の可能性が高い。6T 北東側には谷地形が残っており、第二面について谷地形の盛土造成が推測される。

4T では北側谷地形へ向かう傾斜が観察され、5T では 1 層直下が上位を削平された 7 層となっていた。遺構・遺物は出土していない。

以上の結果より、開発予定地には第一面を中心に、弥生時代の堅穴住居（集落）を主体とする遺跡が存在している可能性が高いと判断した。



図版 1. 2T 検出（西から）



図版 2. 2T : SA1 (南から)



図版 3. 2T : SA1 遺物出土状況（東から）



図版 4. 2T : SA1・遺物 1 (西から)



図版 5. 2T : SA1・遺物 2・3 (西から)



図版 6. 2T : SA1 出土遺物



図版 7. 7T : SD1 (北から)



図版 8. 全景：調査前（南から）

4. 峯元第1遺跡

所在地 山之口町花木 2447-1

調査原因 太陽光発電施設建設

調査期間 2017.1.26

調査面積 10.5m²

担当者 近沢恒典・外山亜紀子

調査後の措置 現状保存

位置と環境 開発予定地は盆地の北東部、盆地東縁の山地帯（大谷山山地）とそのふもとに広がる開析扇状地面（山之口扇状地）との境界域に位置している。山地帯の裾部に沿って北東・南西に細長く形成されたこの境界域は、丘陵地・シラス台地面・成層シラス台地面・河岸段丘面・谷地形が複合し、非常に起伏に富んだ地形となっている。開発予定地は山之口運動公園のあるシラス台地面の南側、一段低い河岸段丘面に立地している。現況は平坦な畠地であるが、河岸段丘面全体が東側の谷地形に向かい緩やかに下る点、西側の成層シラス台地面との間に2m程の段差が形成されている点より、ある程度の造成が予測された。

周辺域では峯元第1遺跡の範囲内にて弥生時代の磨製石剣¹⁾が採集されているほか、校舎改築に伴って2010年に発掘調査が実施された王子山遺跡では、縄文時代草創期～早期の集落跡が調査されている²⁾。

調査の結果 トレンチ3箇所を設定し、人力にて掘り下げ、地下の状況を確認した。

基本的な層序は耕作土（1層）、櫻島文明軽石（2層）、黒色土（3層）、霧島御池軽石（4層）、黒色土（5層）、鬼界アカホヤ火山灰（6層）に大別される。また、2T・3Tでは黄褐色軽石を多く含み、多量の縄文土器片が出土する層（a層）が堆積していた。

1Tでは1層直下が上位を削平された4層となっていた。トレンチ東・南壁には4層へのa層のピット状の落ち込みが観察された。5・6層からは遺構・遺物は出土していない。

2Tでは3層・a層から古代土師器片・縄文土器片が出土した。特にa層からは縄文時代晩期が主体と考えられる多量の土器片（2・3）が出土した。a層は層厚60cmと比較的厚い。上位から中位まではまんべんなく遺物が出土し、下位では比較的遺物量が少ない印象を受けた。また、土器片に混じり、欠損した石鎌の可能性のある石製品（5）や横刃型石器と考えられる石製品（6）も出土している。5層上面で遺構検出を実施し、円形を呈する掘り込みを検出した。検出面からの深さは約35cm、検出面付近にて深鉢口縁部片（1）が出土している。柱穴（P1）も検出され、竪穴住居跡の可能性が高い。

なお、2Tでは通常堆積している4層がない。a層・SA1の出土遺物は縄文時代晩期が主体となっており、4層の堆積より後出するものである。そのため、4層・a層・SA1の先後関係は、4層形成→4層消失→SA1形成→a層形成と把握される。4層消失・a層形成の要因としては、4層の自然流出／人工的な削平、a層の自然堆積／人工的な造成の各組み合わせが想定されるが、特定はできていない。

3Tでは3層より弥生土器片（4）、古代土師器片（7）、縄文土器片が出土し、a層に掘り込まれた浅



図1. 調査区位置

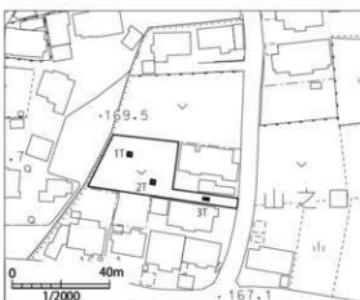


図2. トレンチ配置

1) 都城市教育委員会、2009、「都城市山之口地区遺跡詳細分布調査報告書」

2) 都城市教育委員会、2012、「王子山遺跡」

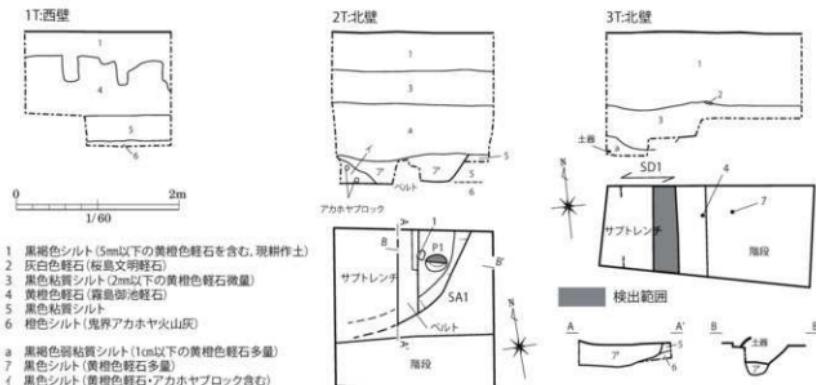


図3. トレンチ土層・平面

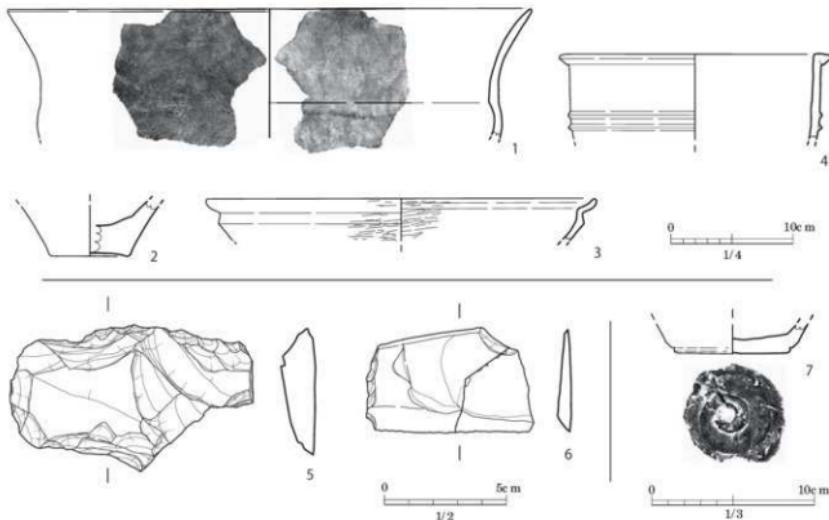


図4. 出土遺物

い溝状遺構を検出した (SD1)。3層の下は a 層となっており、2T と同様の堆積状況と推定された。また、a 層が現地表面下 1.3 m の比較的深い位置にて検出された点と IT・2T の土層堆積状況からは、西→東に向けて緩やかに下っていた旧地形が考えられた。

以上の結果より、開発予定地には古代・縄文時代遺物包含層及び縄文時代の竪穴住居（集落）を主体とする遺跡が良好な状態で存在している可能性が高いと判断した。



図版 1. 1T (南から)



図版 2. 2T 土層 (北壁)



図版 3. 2T : SA1 (南から)



図版 4. 2T : SA1・遺物 1 (南から)



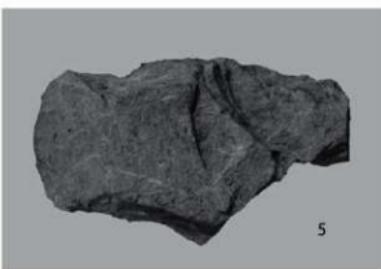
図版 5. 2T : SA1・土層 A-A' (南半部)



図版 6. 3T 西側 (南から)



図版 7. 作業状況 (南西から)



5

図版 8. 出土石器

5. 郡元西原遺跡範囲確認調査

所在地 郡元町 3337 ほか

調査面積 84m² (2016) / 67m² (2017)

調査原因 遺跡範囲確認

担当者 萩原光博・川俣唱子 (2016)

調査期間 2016.11.29 ~ 12.16

近沢恒典・早瀬航 (2017)

2017.9.25 ~ 10.20

位置と環境 郡元西原遺跡は盆地底南東部に広がる開析扇状地面（一万城扇状地）に立地する。現況は平坦な宅地である。本遺跡の所在する郡元町は、万寿年間（1024～28）に成立したとされる島津荘の成立拠点域と推定される地域である。本遺跡より南は、開析谷にそった低位段丘面にて、11世紀後半からの遺跡形成が顕著であり、池島遺跡の初期高麗青磁などの優品の出土、池ノ友遺跡や池島遺跡の円形周溝墓からは「何らかの階層をもつ人物」の存在も想定^①される。

本範囲確認調査は、道路拡幅事業に伴い2016年度上半期に実施された郡元西原遺跡（第2次調査）^②で検出した大型溝状遺構（大溝）に起因する。この大溝は、幅約4m、検出面からの深さ約2m、断面形は端正な逆台形、平面形は調査区内ではほぼ90°屈曲し、屈曲部から北北東（以下、南北ラインと記載）、南東南（以下、東西ラインと記載）の両方向へとびる。周囲の歴史的環境を考えると、確認された大溝は東側を区画内とする大規模な圍繞施設の可能性と共に、島津荘の経営に関する性格を有する可能性も想起され、2016年11月より、大溝の範囲及び東側の状況確認を目的とする遺跡範囲確認調査を実施することとなった。

2016年は鹿児島大学埋蔵文化財調査センターによる地中レーダー探査を実施した上で大溝の延長上及び東側にトレチ15本を設定した。2017年は区画域の北部と大溝東端の確認を目的にトレチ6本を設定した。いずれの調査でも重機にて表土を除去したのち、人力で掘り下げ地下の状況を確認した。

調査の結果 基本的な層序は表土（1層）、旧耕作土（2層）、黒色土（3・4層）、霧島御池軽石（5・6層）、黒色土（7層）、鬼界アカホヤ火山灰（8・9層）となる。

2016年調査 大溝の延長上に1T・2T・4T・5T・10T・11Tを設定した。1Tは大規模な擾乱を受けていたが、2T・4T・5Tでは逆台形断面の大規模な溝状遺構を検出した。遺構埋土の構成は2次調査区とほぼ同様で、下部の①黄色軽石と黒色シルト互層（2T：ス層/4T：ケ層/5T：カ層・キ層）、その上の②レンズ状堆積の青灰色火山灰と③黄色軽石や鬼界アカホヤ火山灰をブロック状に含む黒色土層（2T：ケ層/4T：エ層・オ層）などがみられる。①は溝開放時の流入土、③は人為的な埋め戻し土、②は12～13世紀噴出の火山灰（霧島御鉢起源）の可能性が指摘される^③。遺物は5Tの大溝中層より土師器小皿（1）、青磁碗（4）、白磁碗・皿（2・3）などが出土している。1は口径が約9cmとやや大きく12世紀前半～中頃^④、2～4は小片のため判断が困難であるが12世紀～13世紀前半^⑤の時期が考えられる。この点より大溝の埋土上半の時期が12～13世紀である点が推測される。底面幅は南北ラインでは2T・約2m、東西ラインでは4T・約1.7m、5T・約1.2mと、南北ラインの方が若干広い点、東西ラインでは隅部より離隔するにつれて幅が狭くなる点が観察された。位置・形態・埋土・出土遺物により大溝の延長と

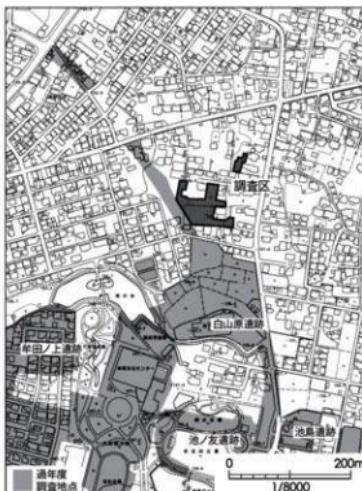


図1. 調査区位置

1) 都城市教育委員会、2018、「郡元西原遺跡（第2次調査）」

2) 都城市教育委員会、2015、「祝古寺3遺跡（第2次調査）」

3) 萩原光博、2004、「都城盆地における地中土器の編年に関する基礎的研究」、「宮崎考古」、19

4) 大宮府市教育委員会、2000、「大宮府考古跡X.V・陶器器分類編」。

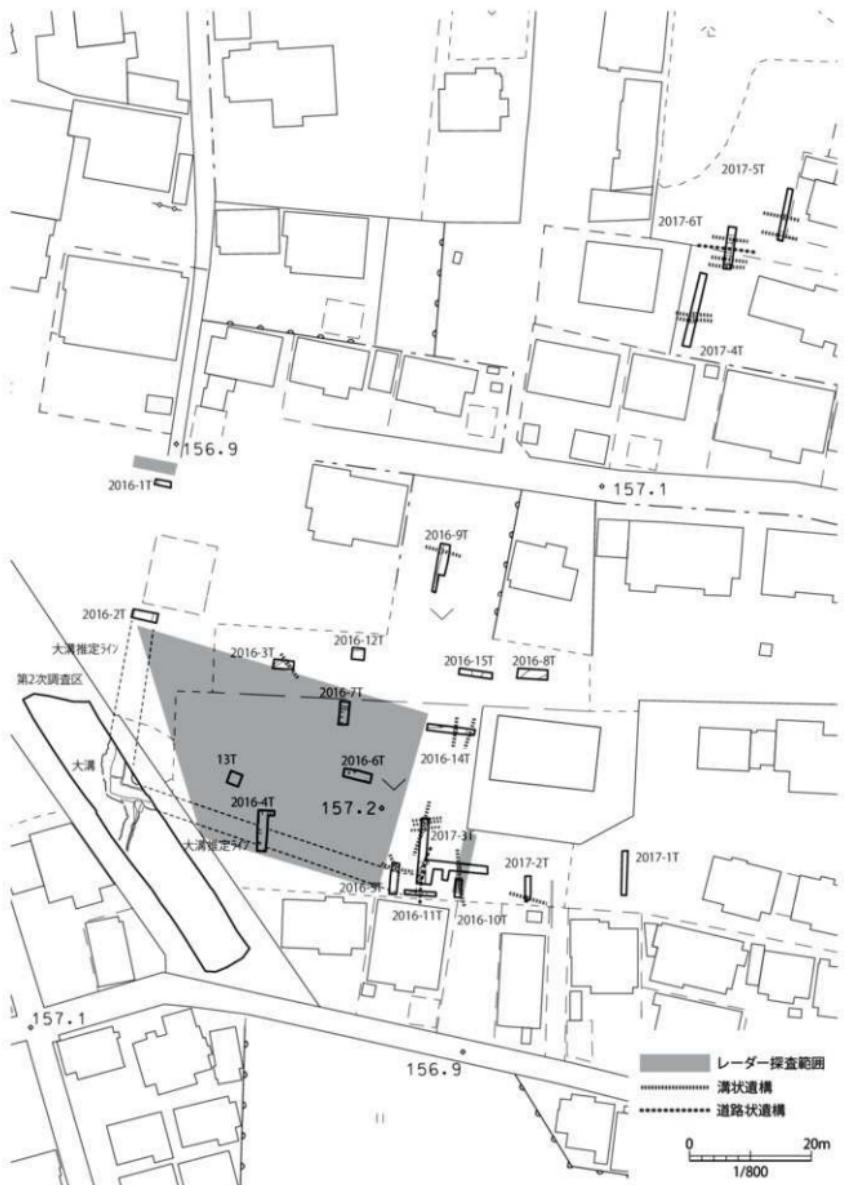


図2. トレンチ及びレーダー探査位置

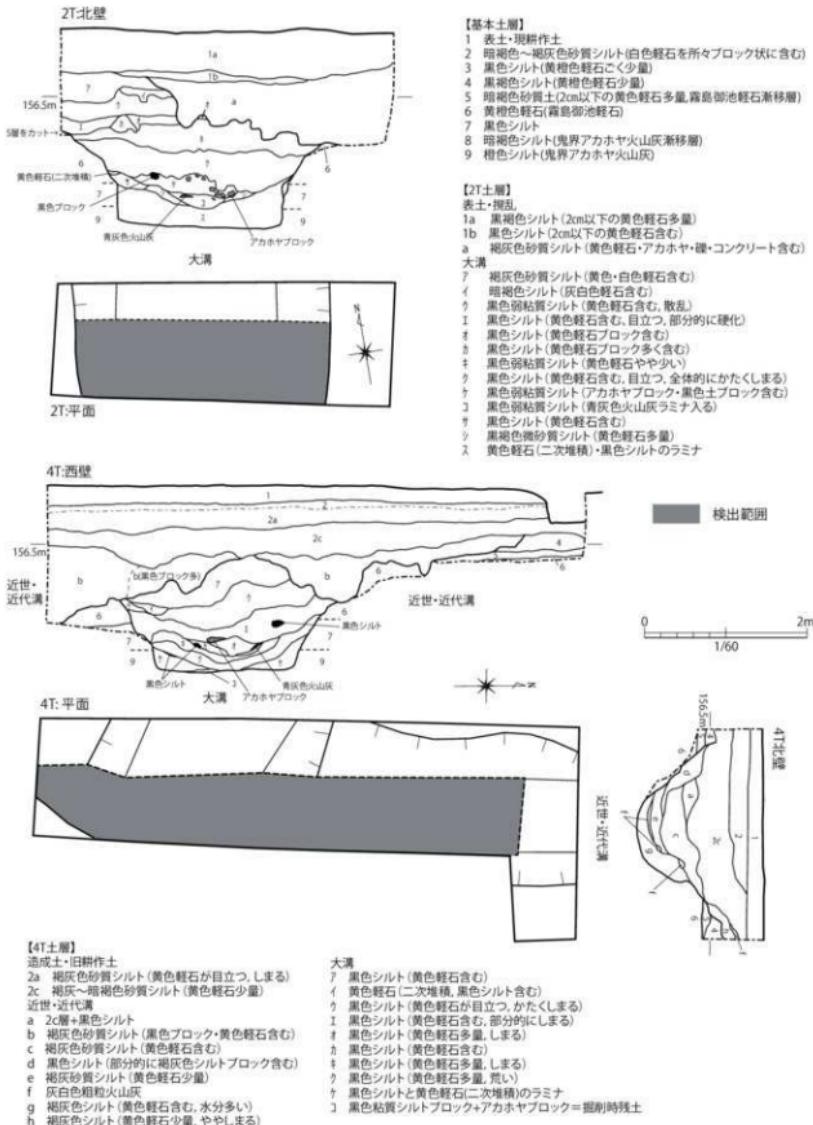


図3. トレント土層・平面・2016-1

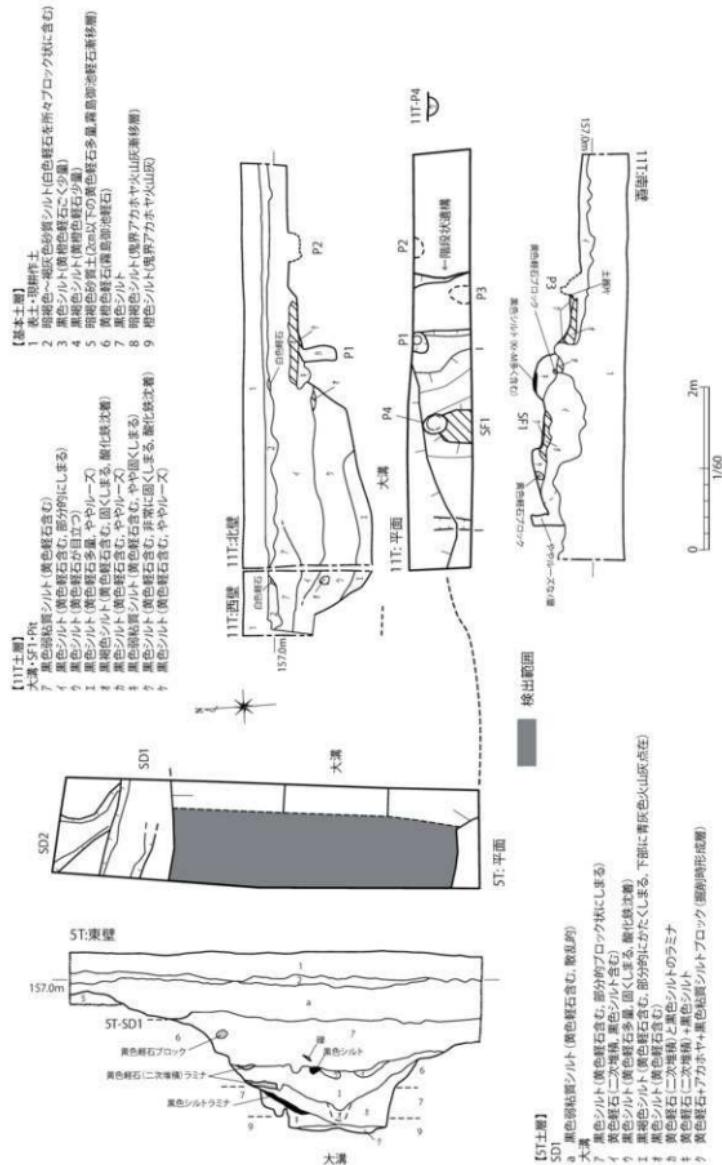


図4. トレンチ土層・平面・2016-2

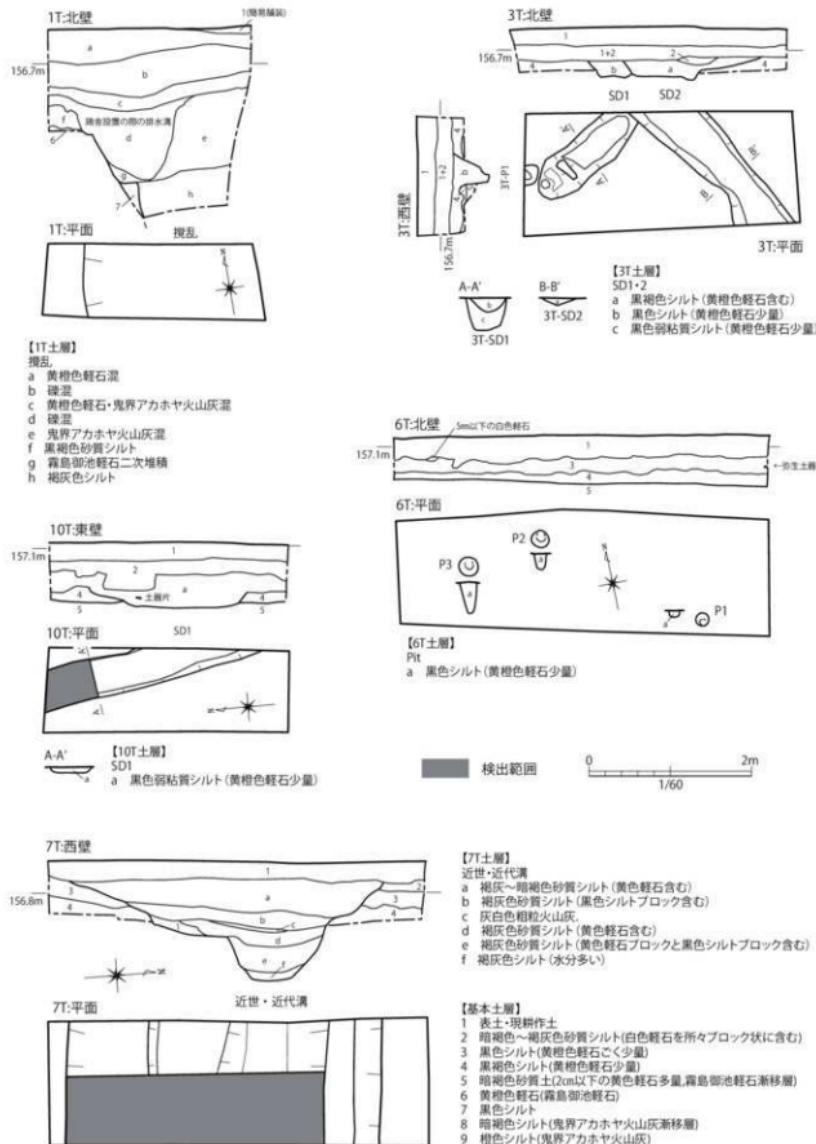


図 5. トレンチ土層・平面・2016-3

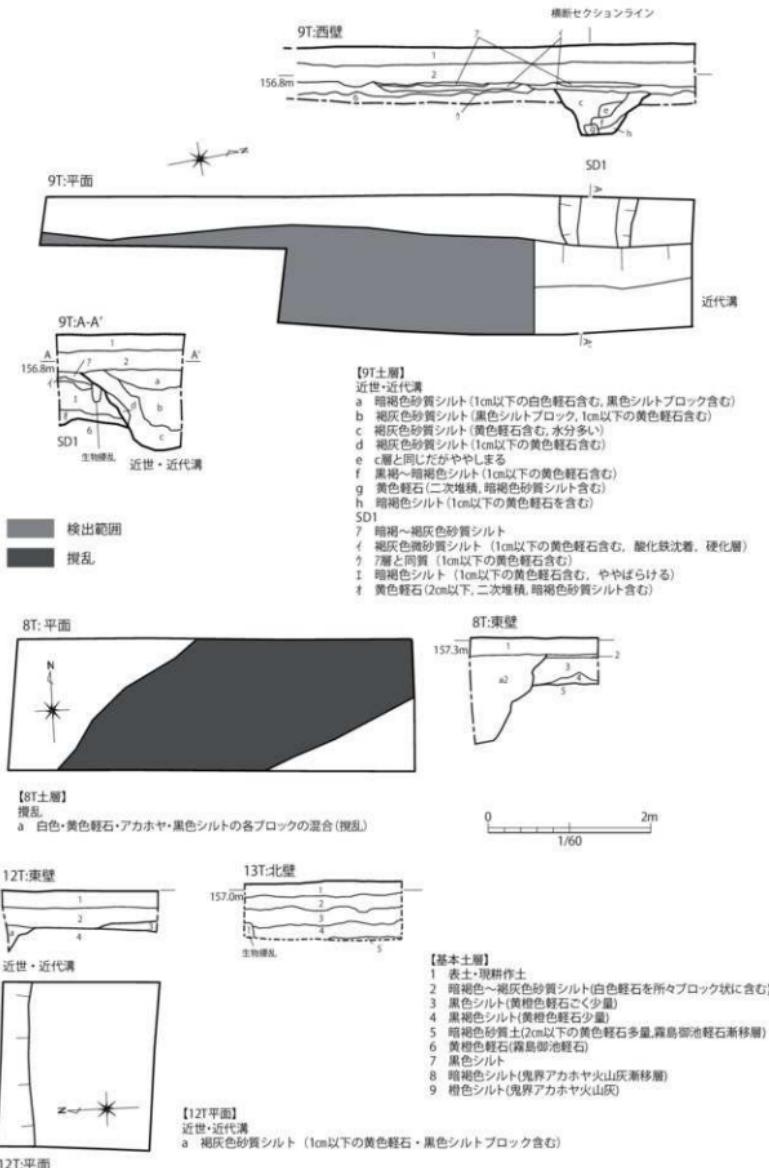


図 6. トレンチ土層・平面・2016-4

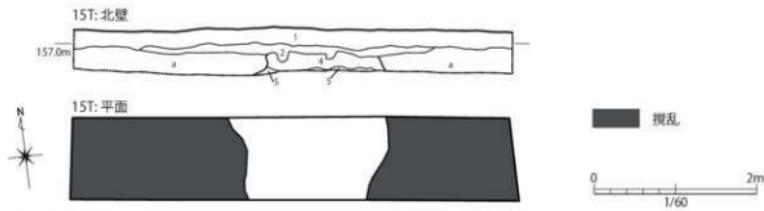
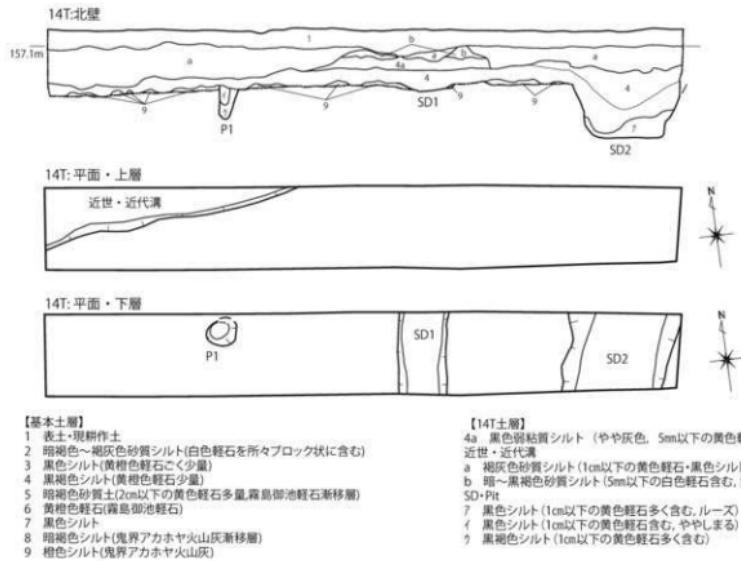


図7. トレンチ土層・平面・2016-5

判断した。また、5Tでは大溝に平行する小規模な溝状遺構(SD1)も検出された。白磁碗(5)が出土している。11世紀後半～12世紀前半の時期が考えられる。10Tでは大溝は検出されず、長軸南北の小規模な溝状遺構(SD1)を確認した。5T・10Tの間の11Tは作付の関係で大溝に平行したトレンチ配置となった。北壁にそって落ち込みがみられ大溝の南壁と捉えられた。その周囲に形成された東から西に下る段堀りと大溝に直交する硬化面(SF1)は、埋没段階で形成された道路状遺構の可能性がある。

大溝東側の状況確認を目的として3T、6T～9T、12T～15Tを設定した。3T、14Tでは小規模な溝状遺構(3T-SD1・2、14T-SD1・2)を検出した。14T-SD2は幅約1m、検出面からの深さ0.6m、11世紀末～12世紀初頭と考えられる土師器壺(13)¹⁾が出土している。逆台形断面しっかりとした溝であり、内部空間を区画する施設の可能性もある。6Tでは浅い柱穴3基を検出した。

なお、4T・7T・9T・12T・14Tの溝状遺構は、近世・近代以降の耕作地の排水を目的とした溝とみられる。

2017年調査 大溝の東端部確認を目的に1T～3Tを設定した。3Tでは南西壁にそって、やや段状の西へ下る落ち込みを検出した。2016-5T・11Tにおける大溝の位置関係より大溝の東端部と判断した。

1) 栗畠光博、2004、「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究」、『宮崎考古』、19。

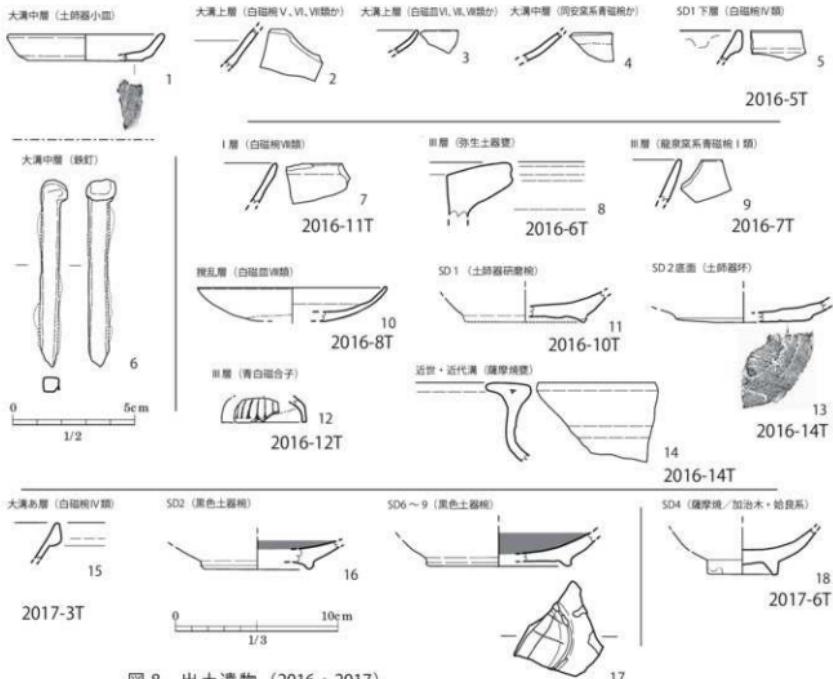


図8. 出土遺物（2016・2017）

埋土は黄橙色軽石が混じる黒褐色土（あ～う層）であり、あ層上位にて白磁挽（15）が出土した。3Tではこのほかに溝状遺構8条（SD2～9）、道路状遺構1条（SF1）を検出した。SD2は長軸の方向より、2016-5T-SD1の東端部の可能性が高い。黒色土器片（16）が出土している。SD3は土層断面より、3層を掘り込こんだ上で底面にやや固くしまる硬化面（ア層・SF1）をもつ溝状遺構と捉えられる。層位と位置関係より2016-11Tの硬化面との接続が考えられる。SD4は2016-10T-SD1との接続が考えられる。SD6～9は土層よりSD6・7→SD8→SD9の先後関係とみられる。SD6～9一括であるが、土師器小片、黒色土器片（17）などが出土している。17は高台内に線刻があり、九字略号の可能性がある。16・17は高台が短く永田藤東遺跡SD3出土例と同様の11世紀末～12世紀初頭¹⁾の時期が考えられた。

1Tでは浅い柱穴（P1～4）を検出した。2Tではトレンチ南端部にて東西方向にのびる溝条遺構を検出した。底面の幅約60cm、検出面からの深さ約40cm、逆台形様の断面形と考えられる。長軸は大溝とほぼ平行し、大溝による区画との関係も想起される。

区画域北部の確認を目的に4T～6Tを設定した。大溝から北へ約100mの場所にあたる。4Tでは長軸方向が東西の溝状遺構2条（SD1・SD2）を検出した。土層断面からはSD2→SD1と考えられる。遺物は出土していないがSD上位に多量の櫻島文明軽石を含むため、15世紀前後の遺構と捉えた。5Tでも4Tと同様に東西方向のやや小規模な溝状遺構（SD1・SD2）を検出した。

6Tでは比較的大規模な硬化面と溝状遺構とが複合する遺構を検出した。溝状遺構は北からSD1（ア層・イ層・ア層）、SD2（え層）、SD3（い層）、SD4（う層）、硬化面は土層よりSF1（a層）、SF2（c層）、SF3（d層）に分類した。遺構群としては①：SD4・SF1、②：SD3、③：SD1・SD2・SF2・SF3の大別が考えられた。

①：SD4・SF1。SD4・う1層出土の18世紀後半の薩摩焼挽（18）より、近世以降の遺構と把握される。

1) 都城市教育委員会、2011、「永田藤東遺跡」

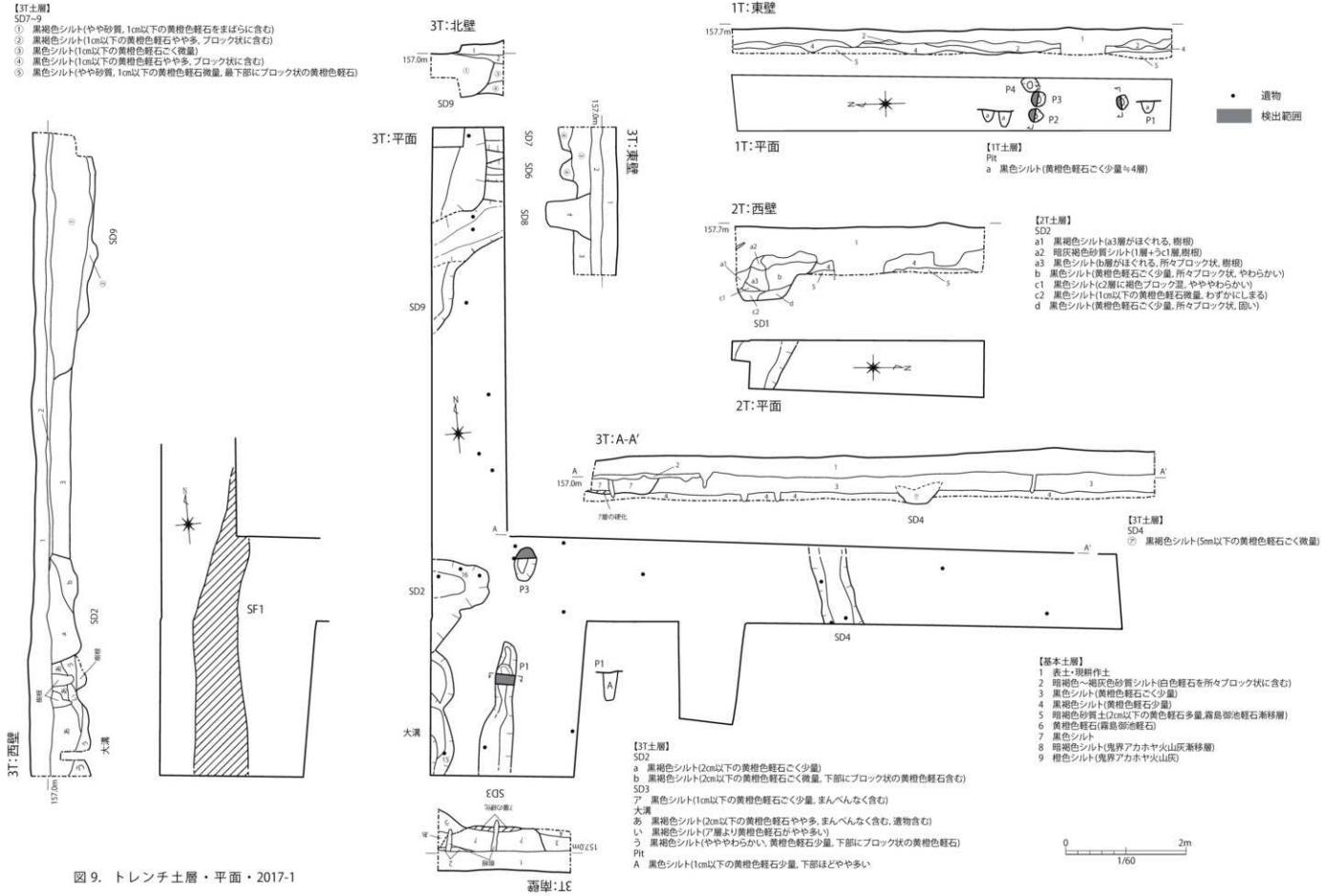


図 9. トレンチ土層・平面・2017-1

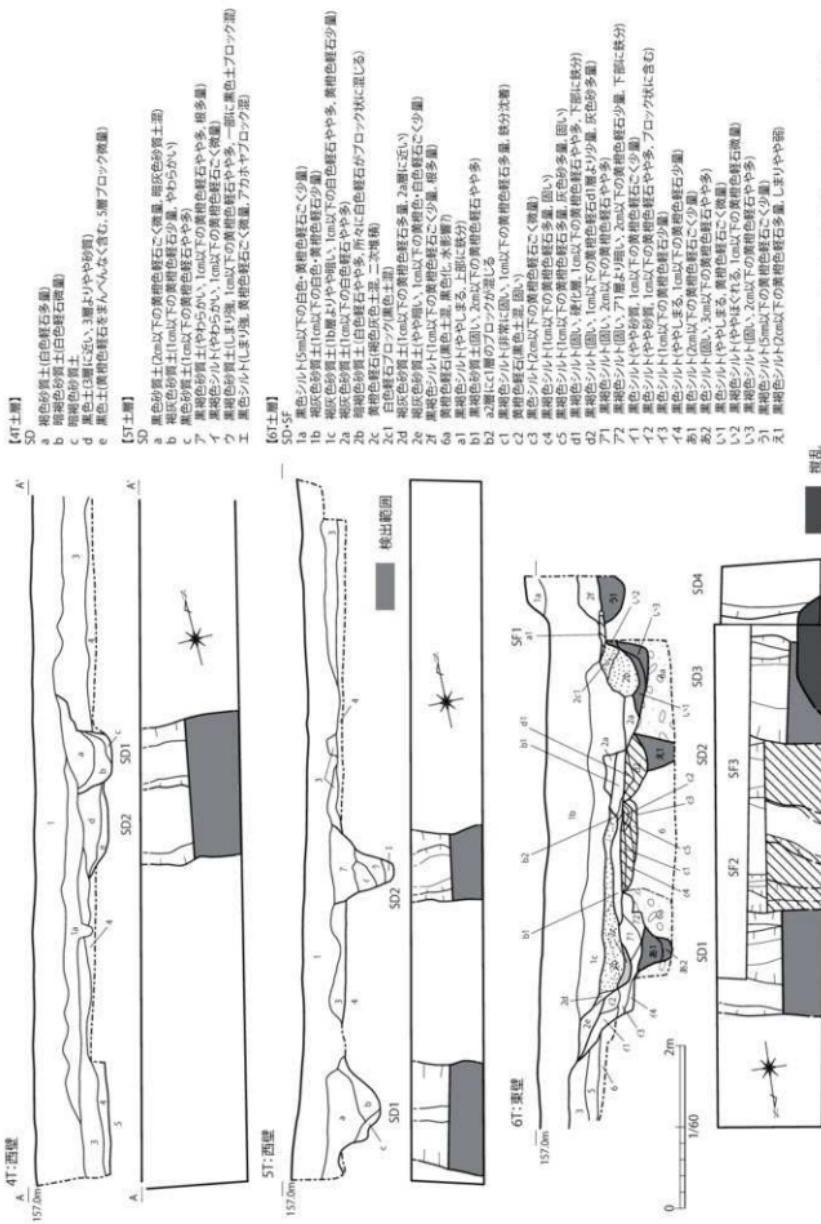


図 10. ドレンチ土層・平面・2017-2

② : SD3。北側の2c層はやや窪んだ断面形であり、南側のSD3と平行する浅い溝状遺構であった可能性もある。両者の間のb層は比較的固くしまるが硬化層ではない。遺物はないが、桜島文明軽石を含む覆土の様相から、軽石降下前後の15世紀後半の可能性が考えられた。

③ : SD1・SD2・SF2・SF3。溝状遺構と硬化層が複合する。土層断面からは両脇に溝を有する道路状遺構との形態も想起されるが、SF2 → SF3、SD2 → SF4などの先後関係は分かるものの、全体的な構成・構築順は不明である。SF2は硬化面内に長軸に沿って浅い溝（c3層・c2層）が構築されていた。また、SD1・SD2・SD3周辺は、6層中に黒色土が混じり、軽石も濁った色調となっており、長期間にわたる水の影響が想定された。遺物は土師器小片しか出土していない。②の直下に位置している点、溝状遺構の配置がほぼ同位置である点より、②の前段階、15世紀代の遺構と考えている。

まとめ 今回の調査は、大溝の延長、大溝東側及び北部の様相の確認を目的に行った。

大溝は南北ラインは25mまでの存在、東西ラインは54mでの終端を確認し、埋土の同質性、逆台形断面の保持、東西ラインに比べて底面幅が広い南北ライン、底面幅が漸減する東西ラインなどの様相も観察できた。東側については、小規模ながらピットや溝状遺構を検出しており、区画や建物等が存在が想定された。大溝及び東側における出土遺物はごく少量にとどまるが、11世紀後半～13世紀前半が中心となる。これら点より、今回検出された遺構群は、各遺構により若干の差はあるものの同時期性は高く、大溝とその区画内に構築された遺構群との把握が可能と考えられる。

北部では大溝は確認できなかったが、中世道路状遺構のほか、近世期までの溝状遺構を検出した。いずれも大溝東西ラインと平行しており、区画が継承されている可能性も考えられた。

今回、大溝の延長や東側の様相を確認することによって、11世紀後半～13世紀前半の区画施設と内部施設から構成される遺跡構造の推定が可能となった。北部では15世紀代と考えられる道路状遺構・溝状遺構などを確認した。また、これらの結果に基づき、郡元西原遺跡の範囲を東・北へと拡大した。だが、区画の東・北の境界、内部施設の詳細は不明な点も多い。今後の課題と考えられる。



図版1. 2016-3T : SD1-2 (南から)



図版2. 2016-4T : 大溝 (東から)



図版3. 2016-5T : 大溝 (西から)



図版4. 2016-10T : SD1 (西から)



図版 5. 2016-14T : SD2 (南から)



図版 6. 作業状況 2016-13T 付近 (西から)



図版 7. 2017-3T (北西から)



図版 8. 2017-3T : 大溝・SD1-3 (南から)



図版 9. 2017-3T : 大溝 (西壁土層)



図版 10. 2017-6T (西から)



図版 11. 2017-6T : SF2・3 (南から)



図版 12. 2017-6T 東壁土層

6. 築池地下式横穴墓群(2003-2号)

所在地 下水流町 2539-2

調査原因 自然崩壊

調査期間 2003.8.5 ~ 29

調査面積 25m²

担当者 桑畠光博(調査・報告)

調査の経緯と経過

平成15年度に県営農地総合整備事業下水流2期地区工事に伴って、都城市教育委員会文化課が築池遺跡の発掘調査を行っていたところ、平成15年8月、発掘調査現場の南側に隣接する畠(宮崎県都城市下水流町2539番12)の地面の陥没が起った。ちょうどその近くで発掘調査を進めていた調査員が現地の陥没穴と空洞を実見した結果、地下式横穴墓の天井部の崩落が起きていると判断されたため、平成15年8月5日から同課が緊急の発掘調査を実施することになった。現場での発掘調査は、平成15年8月29日まで行った。実掘面積は約25m²である。



図1. 調査区位置1

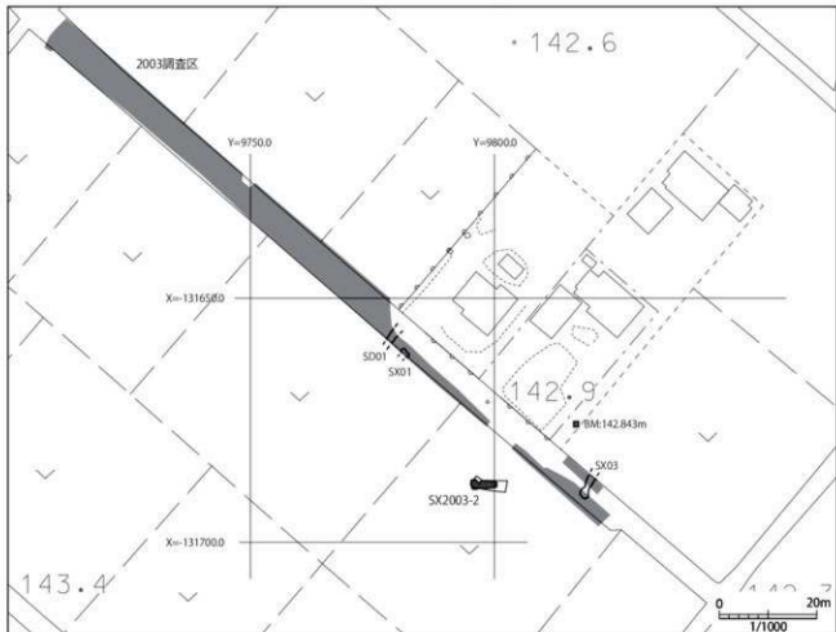
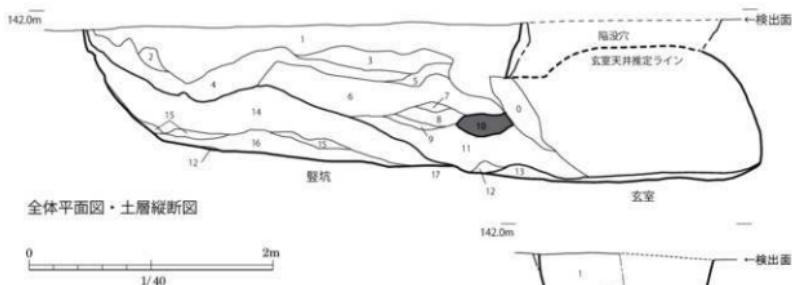
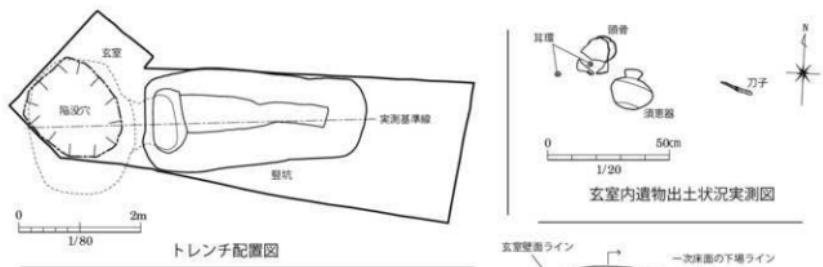
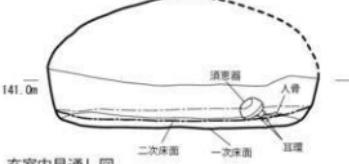


図2. 調査区位置2



- 0 黒色粘質シルト (1cm以下)の黄色軽石少量。軟質でルーズ)
 1 黒色粘質シルト (2cm以下)の黄色軽石含む)
 2 黒色粘質シルト (2cm以下)の黄色軽石含む。かたくしまる)
 3 2cm以下の褐色軽石 (黒色シルト少量)
 4 2cm以下の黄色軽石 (黒色シルトブロック含む)
 5 黒色粘質シルト (1cm以下の黄色軽石含む)
 6 2cm以下の褐色軽石 (黒色粘質シルトブロック含む、ルーズ)
 7 黒色粘質シルト
 8 2cm以下の褐色軽石 (黒色粘質シルトブロック含む、ルーズ)
 9 黑色粘質シルト
 10 黒色粘質シルト (かたくしまる=閉塞土塊)
 11 1cm以下の褐色軽石 (黒色粘質シルト少量含む、ルーズ)
 12 黒色粘質シルト (1cm以下の黄色軽石少量含む)
 13 2cm以下の褐色軽石
 14 2cm以下の黄色軽石 (ルーズ)
 15 黒色シルト (1cm以下の褐色軽石含む、やわらしまる)
 16 2cm以下の黄色軽石
 17 2cm以下の黄色 (灰白色化し肌色を呈する) 軽石=霧島御池軽石
 ※3~9層は一体的な印象

図 4. 遺構土層・平面及び見通し



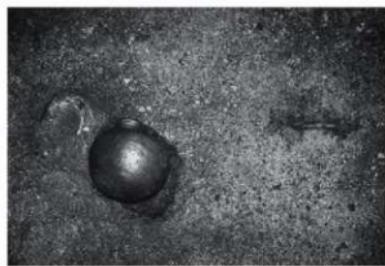
る。その後の整理作業は文化課（当時、市立図書館3階整理作業室）で行い、報告書の執筆・編集作業は平成28年度に実施した。平成15年度の人骨の取り上げと形質に関する報告は鹿児島女子短期大学（当時、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）の竹中正巳教授に依頼した。

調査の方法と概要

陥没孔は玄室天井部にあいたものであることが推察されたため、その穴から羨道の方向を推定して、東側に竪坑検出のためのトレンチを入れた。当初予想していた以上に竪坑が細長くのびることが判明したため、その都度トレンチを拡張しながら作業を進めた。トレンチ掘削の際、表土の現耕作土中から須恵器の破片が出土した。竪坑の範囲を確定させた後、竪坑の埋土を半裁して断面の記録をとった。埋土には霧島御池軽石を多量に含む層と黒色土が主体となる層のセットが2枚確認された。被葬者を玄室内に安置した後、竪坑を埋め戻して、その後再度掘り返されたものと考えられる。竪坑を完掘すると、東西に細長い方形プランとなり、長軸は約3.6m、短軸は玄室側が約1.5m、反対側が約1.25mで、横断面形は逆台形の溝状を呈する。玄門の床面から約30cm浮いたレベルに黒色土の土塊を利用した閉塞が確認された。最終段階における閉塞のレベルを反映していると推察される。玄室内部の崩落した土砂を取り除くと、玄室北側に須恵器平瓶（7）と人骨が検出された。人骨は割れた頭骨を重ね合わせた状態で、骨片の間には天井から崩落したとみられる霧島御池軽石粒が挟まっていた。須恵器平瓶は口縁部を下に向かた状態で検出された。頭骨片の下位の床面上からは金銅製耳環2点（8・9）が並んで見つかり、須恵器平瓶の東側の床面上からは刀子（10）が1点見つかった。刀子には、鞘の木質が残っている。須恵器平瓶は竪部にヘラ記号をもつ、胸部が丸く膨らむ形態は、陶邑編年¹⁾のⅢ期TK217型式に該当すると思われる所以、7世紀前半に位置づけられると考えられる。遺物を取り上げた後、床面を精査する際に、赤色顔料の散布が確認された。蛍光X線分析の結果この顔料には、Fe₂O₃が高い値で含まれており、ベンガラであることが判明した。

羨道は幅約0.75m、高さ約0.8mである。玄室の平面プランは、長軸約2.2m、短軸約1.5mの隅丸方形で、いわゆる平入りの形態となる。竪坑は玄室の大きさに対して、異常に細長いもので、横穴墓の影響を受けたものと考えられる。また、本事例においては、最終的な埋葬儀礼として、玄室内に被葬者を安置した後に、かなりの時間が経過してから、白骨化した骨の集骨と須恵器平瓶の倒置が行われたものと推察される。

1) 田辺昭三。1981。『須恵器大成』。角川書店



図版1. 玄室内遺物出土状況



図版2. 金銅製耳環出土状況



図版 3. 竪坑検出状況



図版 4. 竪坑埋土断面



図版 5. 竪坑完掘状況



図版 6 羨門閉塞状況(黒色土塊による閉塞)



図版 7. 人骨と須恵器平瓶出土状況

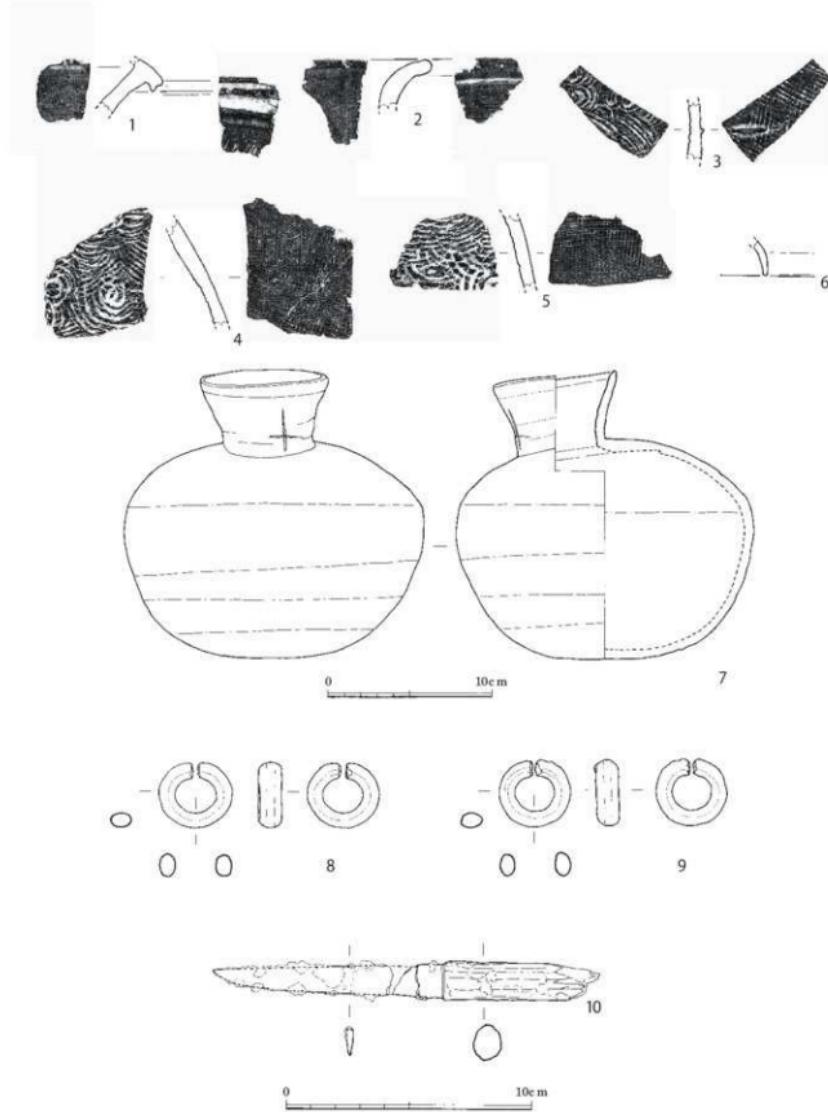
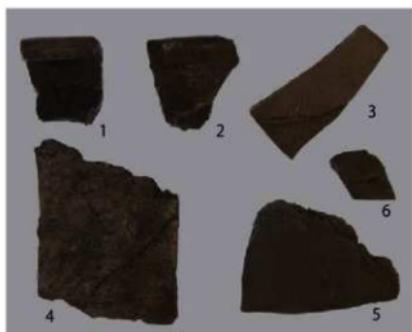


図 6. 出土遺物 1



図版 6. トレンチ掘り下げ時表土出土須恵器



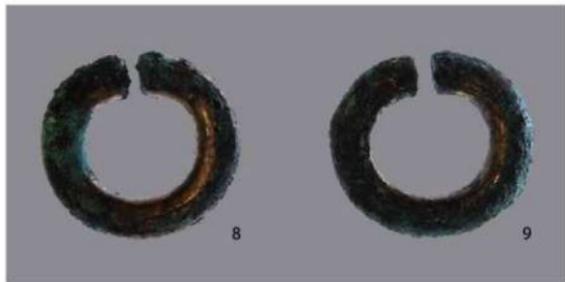
図版 7. 須恵器平瓶



図版 8. 須恵器平瓶(7)
頸部ヘラ記号拡大



図版 9. 刀子



図版 10. 金銅製耳環

7. 宮崎県都城市築池地下式横穴墓 2003-2号墓出土の古墳人骨

竹下正巳（鹿児島女子短期大学）

2003年8月、宮崎県都城市築池地下式横穴墓2003-2号墓が発見された。この地下式横穴墓は建設重機が玄室天井を踏み抜き発見され、発掘調査がただちに行われた。2003-2号墓は、墓の構造的には、玄室へ向かう方向へ、豊坑が長いという特徴を持つ。長い豊坑は横穴墓の墓道を想起させる。玄室内からは、人骨1体のほかに、須恵器の平瓶1個、刀子1本、耳環2個が出土した。赤色顔料が玄室の北側、中央部、南側の3箇所で確認できた。中央部の赤色顔料の広がる範囲が一番大きい。人骨の保存状態はよくない。しかし人骨と赤色顔料の出土状況から、頭を北に向かって伸展葬であったと判断できる。人骨の所属年代は、考古学的所見から、古墳時代後期に属すと考えられる。

人骨は玄室の北側に頭蓋片が4個と歯が4本遺存していた。頭蓋片は、①前頭骨から右頭頂骨にかけての破片、②左頭頂骨の破片、③後頭骨の破片、④右側頭骨の乳様突起部と同定できた。乳様突起を除く3個の破片は、すべて、内板が玄室の天井を向き、外板が床面を向いた状態で重なって出土した。上から床面の方へ、①の破片、②の破片、③の破片の順に重なっていた。各破片の間には、濁った色の軽石が挟まっている。④の右側頭骨と4本の歯は①②③の骨の重なりの南側から検出された。側頭骨には赤色顔料が付着し、その近くからは、耳環が出土した。

人骨の性別は右の乳様突起が小さいことから、女性と判定した。年齢は、歯の咬耗がMartinの1度で、観察できる冠状縫合と矢状縫合の内板側が融合し始めていることから、壮年後期と判断した。前頭縫合は残存していない。歯の歯式は以下の通りである。

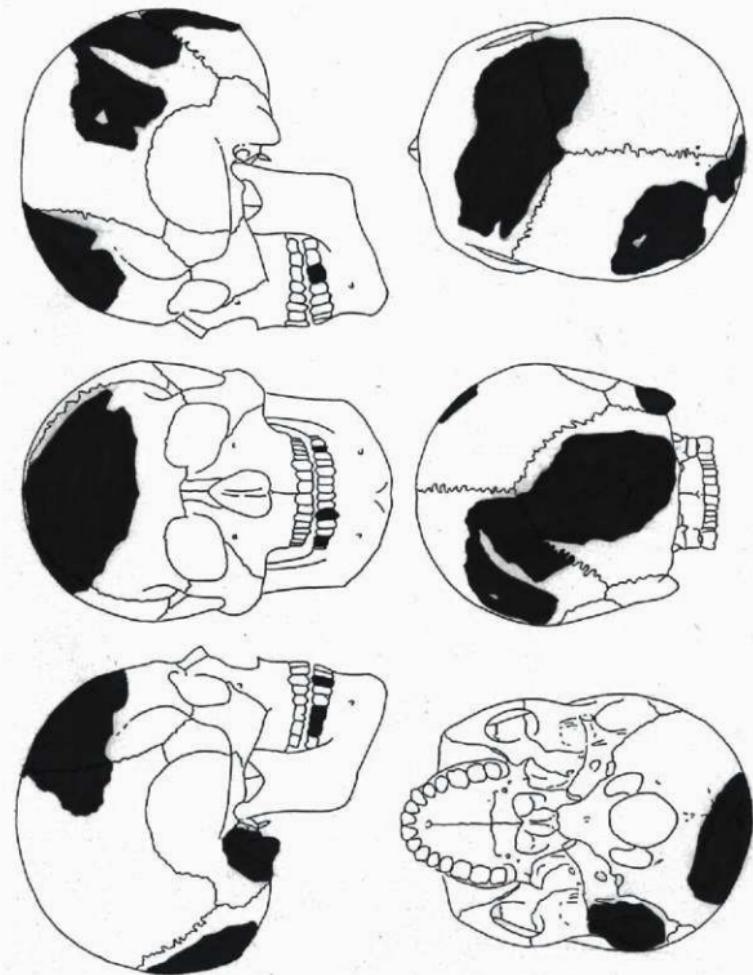
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	7	6	×	×	3	×	×	×	×	×	6	×	×	·	：
·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	遊離歯
·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·

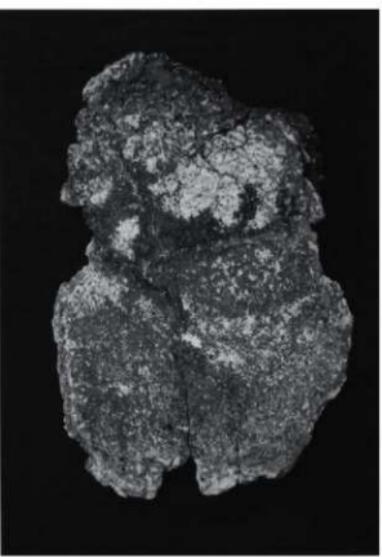
観察できた4本の歯に、う蝕やエナメル質減形成は認められない。

3つの頭蓋片の重なりであるが、骨が朽ちていく過程で、よほどの偶然が重ならなければ、脳頭蓋を構成している骨が内板を上に向かって重なることはある。頭蓋片の重なりの周囲で検出された赤色顔料は頭蓋片よりも低いレベルで検出されていることから、遺体埋葬時の玄室床面は現在の人骨の検出面よりも低い位置であったことが推測される。また、豊坑の土層断面の観察結果から、この墓はいったん遺体を埋葬後、もう一度玄室が開けられた可能性が高い。さらに玄室内では、副葬されていた座りのよい平瓶が倒れている。これらを考え合わせると、いったん遺体を埋葬し、かなり時間が経った段階で、玄室がもう一度開かれた。そして、その時には、すでに骨は朽ちており、玄室に入ったひとが、故意に、頭蓋片3片を重ね、平瓶を倒した可能性が十分考えられる。

古墳時代後期、特に7世紀前後になると、地下式横穴墓でも横穴墓の墓道のように長い豊坑をもつ墓が認められるようになる。また、墓使用の最終的な理葬儀礼として、白骨化した人骨の集骨と、副葬されていた須恵器等の移動という行為が行われていたことが、宮崎県西都市常心原地下式横穴墓群6号墓の発掘調査から明らかになっている。本墓も、常心原例同様、使用墓の最終儀礼として、頭蓋骨を重ね、平瓶を倒すという行為が行われた可能性を想定してもよいように思われる。

图 1 篱池地下式横穴墓群 2003-2 号：出土人骨保存状况





図版 1 前頭葉から右頭頂骨にかけて（内板側）



図版 2 左頭頂骨の破片の一部（内板側）



図版 3 後頭骨の破片（外板側）



図版 4 右側頭骨の乳様突起部

報告書抄録

ふりがな	みやこのじょうしないいせき 11
書名	都城市内遺跡 11
副書名	
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第135集
編著者名	近沢恒典（編） 亲畠光博 竹中正巳
編集機関	都城市教育委員会事務局文化財課
所在地	宮崎県都城市菖蒲原町19-1-16 郵便885-0034 電話(0986)23-9547
発行年月日	2018年3月27日

遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
飛古第3遺跡 (第1地点)	都城市都元町3428	31.738830	131.099955	4/12 (再確認 5.8-11)	44m ²	宅地造成
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世	中世土師器・陶磁器		大溝・ピット		第1次調査区から続く大溝を検出
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
片平遺跡(第2地点)	都城市志比田町4991-10	31.375282	131.053631	1/9	20m ²	福祉施設建設
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
散布地	古墳	弥生土器		平行状居住・溝状遺構		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
室元第1遺跡	都城市山之口町花木2447-1	31.784668	131.158329	1/26	10.5m ²	太陽光発電施設建設
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	縄文土器・石器		駄六住居跡		
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
都元西原遺跡 (範囲確認)	都城市都元町3337	31.741615	131.094426	2016/11/29-12/16 2017/9/25-10/20	84m ² 67m ²	遺跡発掘確認
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
集落跡	中世	中世土師器・白磁・青磁・国産陶器		大溝・溝状遺構・ピット		第2次調査区から続く大溝の範囲確認
遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
染池地下式横穴墓群	都城市下水流町2539-2	31.815699	131.101211	2003.8.5-29	25m ²	自然崩壊
種別	主な時代	主な遺物		主な遺構		特記事項
地下式横穴墓	古墳	人骨・耳環・刀子・須恵器		地下式横穴墓		2003-2号墓

都城市文化財調査報告書 第135集
都城市内遺跡11

2018年3月27日

編集・発行 都城市教育委員会事務局 文化財課
宮崎県都城市菖蒲原町19-1-16

郵便885-0034 電話(0986)23-9547

印刷・製本 株式会社 文昌堂
宮崎県都城市都北町7166
郵便885-0004 電話(0986)36-6600



幸せ上々、みやこのじょう

日本の内を癒す、とておきの自然を保護。